

子ども虐待 わたしたちにできること

小さな声を聴き，子どもたちとつながり続けよう

©へるす出版

特集にあたって

気づけますか 子どもからの SOS

子どもたちの未来に思いをはせよう

小児看護にかかわっている皆さんは「子ども虐待」と聞いてどう感じますか？ 子ども虐待のあまりに悲惨なニュースは、見ない日がないほどであり、「虐待する親は許せない」「関係機関は何をしてたんだ」「早く子どもを保護してくれてたらよかったのに」などと憤りを感じることも多いのではないのでしょうか。

ただ、虐待死亡は何の前触れもなく突然起こるわけではありません。それまでに親子はきっと、いろいろな方法で小さな声なき SOS を出していたはずです。例えば、月齢が小さい子どもの家庭内でのケガ、季節や身体に合わない身なり、待合室での親子の言動や様子、精神的に不安定な妊婦さんなど、診療のなかで『何か気になる』と感じることがあると思います。閉ざされた家庭のなかで、夫婦関係や経済的な問題、子どもの特性などの育てづらさ、また何より親自身の育ちや愛着の問題などもあり、少しずつ問題が積み上がっていくことで、地域や支援者から孤立し、悲惨な虐待ケースが発生するのではないのでしょうか。人に頼る経験やその力がない親、そもそも声をもたない子どもは、自分から「助けて」と声を上げることができないのです。

医療機関は、健診、出産、予防接種やちょっとした困りごとでも親子が頼って受診してくれるところです。劣悪な虐待死亡ケースであっても、もっともっと早い段階で小さな声なき SOS をどこかの医療機関で発していたはずです。「虐待対応」と聞くと、虐待を発見して児童相談所に通告することがすべてのように思われがちです。しかしそれだけではなく、

目の前の親子を見たときに、親子が置かれてきた背景や10年後、20年後の姿などにも思いをはせられるようになってもらえたらと思い、本特集を企画しました。

まず、虐待予防・対応について先進的に活動されている看護職の方々からの概説、そして「虐待かも」と気づくための診察のコツや医学所見について、専門家の方々からの解説をいただきます。また、虐待対応は医療者だけではできず、多機関・多職種によるのりしろのある連携が必須です。子どもたちが連携の隙間に落ちないための、知っておくべき仕組みや法律についても解説いただきます。そして最後に、虐待を受けた子どもたちや無念にも亡くなってしまった子どもたちとつながり続けている先生方からの心強いメッセージをいただきました。

私たちの手を離れた後も、子どもたちはいろいろな思いを抱えながら、それでもたくましく生き抜いていきます。実親とはうまくいなくても、周りの大人が温かく子どもを守りながらつながり続けることが、きっと子どもたちの大事な礎の一つになり、その子の明るい未来につながっていくと信じています。読者の皆さんが、そんな子どもたちを支え続ける仲間の一人になっていただけることを願っています。

木下あゆみ Kinoshita Ayumi

独立行政法人国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

小児アレルギー科医長，育児支援対策室長